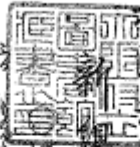


香道秋農光 下



十品

根合香小引 大口含翠組

古き物語の集に曰く、永承六年五月五日、
内裏に菖蒲の根合せ有りけり。此のこと
去(さん)ぬる三月晦日、堪能の上達部(かんだちめ)ひとり
ふたり殿上人等をめ(召)して、弓の勝負
ありけり。また、鶏合せ有りけり。其の勝負なき

香道秋農光 下

新組十品

○ 根合香(ねあわせこう) 小引 大口含翠組

古き物語の集に曰く、「永承六年五月五日、

内裏に菖蒲の根合せ有りけり。此のこと

去(さん)ぬる三月晦日、堪能の上達部(かんだちめ)ひとり

ふたり殿上人等をめ(召)して、弓の勝負

ありけり。また、鶏合せ有りけり。其の勝負なき

香道考ノ巻下
 ばよりて菖蒲の根と名付包と後香を
 改て終る也と古来組香と名付
 香闘雞香のふむいひて紫白の菖
 蒲ノ根ひきの様を立物と根合
 の勝負ふむいひて物語いつる和歌
 ノ題五首瓜物香及び根合ノ勝
 負物等其書の趣をうつけり

香五種也
 一種と菖蒲と名付 三包
 一種と郭公と名付 二包
 一種と早苗と名付 二包
 右の内一包づつ試し出す
 一種を「恋」と名付け 一包
 一種を「祝」と名付け 一包
 右試なし客なり
 右試み三種終りて、残る六包に試なき二包

によりて菖蒲の根をあわせて勝負を
 決せられけるなり。」と。古来、組香に「矢数
 香」「闘鶏香」あるにならいて、紫白の菖
 蒲の根ひきの様を立物とし、根合
 の勝負になぞらう(擬)。古き物語にいえる和歌
 の題、五首を出香の数となし、飾
 り物等、其の書の趣をうつけり侍る。

香五種なり

- 一種を「菖蒲」と名付け 三包
- 一種を「郭公」と名付け 二包
- 一種を「早苗」と名付け 二包
- 右の内一包づつ試に出す
- 一種を「恋」と名付け 一包
- 一種を「祝」と名付け 一包
- 右試なし客なり

右試み三種終りて、残る六包に試なき二包

をまゝ其内いづまかり九二包を焼き
 残り六包を一包づつ焼(たき)出す。一炷びら
 きなり
 若し両方持し成る所焼(たき)き
 二包を焼(たき)き勝負を決すべし
 記 掃徳(やう)

ゆゑ星一つ記とて一獨(ひとり)客(きやく)は二点、
 二つ付べし。客は二点、獨客は二点、
 客は二点、常(つね)の聞(き)き一点たるべし
 根合香之記 香(か) 一菖蒲(しょうぼ) 二郭(かく) 三菖蒲(しょうぼ)
 郭(かく) 菖蒲(しょうぼ) 早(はや) 菖蒲(しょうぼ) 郭(かく) 菖蒲(しょうぼ)
 東(とう) 菖蒲(しょうぼ) 早(はや) 菖蒲(しょうぼ) 郭(かく) 菖蒲(しょうぼ)
 大(だい) 菖蒲(しょうぼ) 早(はや) 菖蒲(しょうぼ) 郭(かく) 菖蒲(しょうぼ)

を交せて、其の内いずれなりとも二包とり除き、
 残りて六包を一包づつ焼(たき)出す。一炷びら
 きなり。
 もし、両方「持」になりたる時は取り除き置きたる
 二包を焼(たき)き、勝負を決すべし。

記録認めよう

聞きつづく(続)所は「点」もつづくべし。「菖蒲の根
 長きは勝」とする意をつつす。当らざる

には「星」一つ記すべし。独聞き誤りたるには「星」
 二つ付すべし。当りは、「客」は二点、獨客は二点、
 獨聞は二点、常の聞き一点たるべし。

「根合香之記」

堀江 葛 早 早 郭 以 郭 三 星 四
 伊香保 郭 葛 葛 早 郭 四 星 三
 西勝 点 十三 星 九
 玉江 郭 早 葛 早 以 郭 六 星 一
 益田 郭 葛 早 以 郭 七 星
 安積 早 以 早 郭 葛 葛 星 八
 平号 月 日
 札の紋の事 葛蒲の奇多歌を用ゆ

安積沼 伊香保沼 堀江 益田池
 長澤池 玉江 大淀 富緒川
 筑摩江 名乗池
 立物の事
 紫の葛蒲五本 各札の紋の名所の字を
 白の葛蒲五本 右同数金短冊を用
 初めに洲浜にもたせ置き、一炷聞き当りて盤
 に立つべし。聞きに随いてすすむ。七点聞かば文台に

※ 連続正解は、長点をつないで根の長さを表す。

札の紋の事 葛蒲の歌名所を用ゆ

安積沼(あずみのぬま) 伊香保沼(いかぼのぬま) 堀江
 益田池(ますだのいけ)
 長澤池(ながさわのいけ) 玉江 大淀 富緒川(とみのおがわ)
 筑摩江(つくまえ) 名乗池(なのりのいけ)

立物の事

紫の葛蒲五本 (各札の紋の名所の字を
 銀短冊に書き付くべし)
 白の葛蒲五本 (右同数金短冊を用ゆ)

初めに洲浜にもたせ置き、一炷聞き当りて盤に立つべし。聞きに随いてすすむ。七点聞かば文台に

至り、文台の上を指すべし。是に至るを「勝」とす。但し、「客」二点ゆえ六炷にて至るなり。もし「客」の香除き、独聞もなき時は六炷にて勝負を定め、「薬玉」をかけて「文台」に立つべし。盤の図は始めの巻に委（くわ）し、見合せすべし。「文台」は烏木（こくたん）、紫檀にて作るべし。「勝負の場」に左右に分けて置く。図に委し。「洲浜」二つ、東西に置き、一方は「松」、「岩」、「鶴」、「亀」、「やり水」、青色の

薄ものを打敷きすべし。一方は「若松」、「岩」、「菖蒲」やりのうりまき右に同じ。古き物語に「岩は沈香をもて作り、松、鶴、亀、やり水等は白銀をもて作る」とあり。打敷の薄ものは波の文（文様）になぞらうといえり。今は好みにしたがいて糸花などをも用うべきか。古き集の説に随い、金銀をもてかざりたる薬玉に五色の糸をつけ（付）わがねて（縮）、

古き集の巻下

薄ものを打敷きすべし。一方は「若松」、「岩」、「菖蒲」、「やり水」、うちしき右に同じ。古き物語に「岩は沈香をもて作り、松、鶴、亀、やり水等は白銀をもて作る」とあり。打敷の薄ものは波の文（文様）になぞらうといえり。今は好みにしたがいて糸花などをも用うべきか。古き集の説に随い、金銀をもてかざりたる薬玉に五色の糸をつけ（付）わがねて（縮）、

表方に五つながれづつ「洲浜」の上に置くべし。
図にくわし。独客、または六炷ともに聞きたる時、
此薬玉を立物に懸くべし。

○初音香 (はつねこう) 齊藤如竹組

香五種也

一 四包 二 四包 三 四包
右の内一包づつ試に出す

客 「ウ」 各一包づつ

右は試なし 二色の香二包なり

右試終りて、以上十一包打ちませ焚き出すなり。
初めの一炷、連中、聞き、札打ち終わりにて、香元、一の
折居を出し置き、札をうつし置きて香終
るまで開かざるなり。二炷目より一炷びら
きなり。最初の香は十炷聞き終りて、折
居をひらき記録す。当りたるを「初音」
と記録す。始終の勝負を是にて
定むなり。

立物の白梅 大小二本 紅梅 二本 鶯 二羽
 右白梅一本 鶯一羽 左に立つるなり。紅梅
 一本 鶯一羽 右に立つるなり。折枝の少(ちいさ)き
 紅白梅二本は、盤の外、「紅梅方」、「白梅
 方」連中の前に別に台をこしらへ
 立て置き、「金短冊」十枚かけ置く。「紅梅(方)」も同
 じように認め、「銀短冊」十枚かけおくべし。
 双方の短冊に梅の古歌を書くべし。

右短冊聞き勝たる方より、勝たる数ほど
 盤上の梅にかく(掛)べし。「客」一人間は三枚
 かくべし。
 「鶯」は、双方当り数多くとも一間ずつ
 行き、「客」壱人間は二間行く。五炷目、「勝
 負の場」にて勝たる方の梅の枝へ「鶯」
 二羽ともにとまらすなり。後三炷聞き、勝たる
 方は「鶯」一羽とりかえし、わが方の梅の枝に

立物は、「白梅」(大小二本)、「紅梅」(大小二本)、「鶯」二羽。

右白梅一本、鶯一羽、左に立つるなり。紅梅

一本、鶯一羽、右に立つるなり。折枝の少(ちいさ)き

紅白梅二本は、盤の外、「紅梅方」、「白梅

方」、連中の前に別に台をこしらへ

立て置き、「金短冊」十枚かけ置く。「紅梅(方)」も同

じように認め、「銀短冊」十枚かけおくべし。

双方の短冊に梅の古歌を書くべし。

右、短冊聞き勝たる方より、勝たる数ほど

盤上の梅にかく(掛)べし。「客」一人間は三枚

かくべし。

「鶯」は、双方当り数多くとも一間ずつ

行き、「客」壱人間は二間行く。五炷目、「勝

負の場」にて勝たる方の梅の枝へ「鶯」

二羽ともにとまらすなり。後三炷聞き、勝たる

方は「鶯」一羽とりかえし、わが方の梅の枝に

と備ふと也十炷因縁が記録する時
 最初の香の場一段あけ置き、二番目
 より記録す。尤も当りばかりを記すなり。
 勝負はたとえば白梅方(七炷)、紅梅方(七炷)
 は「持」なれども、最初の香、折居より出し、
 一炷にても当り多き方を「勝」とす。また、
 白梅方(九炷)、紅梅方(八炷)当れば、一炷の
 負けたりといえども、最初の香に一炷の
 負けたりといえども、最初の香は一炷の

あり方とく紅梅方九炷のあたりになれば
 あたり数同じといえども「勝」とす。また、あたり
 数一炷少なけれども、最初の香に当り
 有るときは、「持」とす。最初の香、記録には
 「初音」とかくべし。また、「初」の一字ばかりを
 書くも可なり。
 「白梅方」上座たるべし。盤の図、寸法、
 上巻に委し。

とまらずなり。十炷聞き終り記録する時、
 最初の香の場一段あけ置き、二番目
 より記録す。尤も当りばかりを記すなり。
 勝負はたとえば白梅方(七炷)、紅梅方(七炷)
 は「持」なれども、最初の香、折居より出し、
 一炷にても当り多き方を「勝」とす。また、
 白梅方(九炷)、紅梅方(八炷)当れば、一炷の
 負けたりといえども、最初の香に一炷の

当り有りて、紅梅方九炷のあたりになれば
 あたり数同じといえども「勝」とす。また、あたり
 数一炷少なけれども、最初の香に当り
 有るときは、「持」とす。最初の香、記録には
 「初音」とかくべし。また、「初」の一字ばかりを
 書くも可なり。
 「白梅方」上座たるべし。盤の図、寸法、
 上巻に委し。

初音香之記

一 松葉 二 夕草
三 玉名 密 大南雲
少尾花

三 三 一 夕 一 密 三 一 二 二

白梅方

果 蕨 袖 二 三 一 夕 一 密 三 一 二 二 皆

白梅 二 夕 一 密 三 一 二 二 皆

上 吹 一 夕 一 密 三 一 二 二 皆

白梅方 袖 二 三 一 夕 一 密 三 一 二 二 皆

杉竹 袖 二 三 一 密 三 一 二 八

梧桐 袖 三 一 密 三 一 二 五

保松 二 三 一 密 三 一 二 五

年号月日

○ 隨蝶香小引 大枝流芳組

開元天寶遺事曰 開元末 明
皇每至春時 且暮宮中
使嬪妃爭採艷花 帝親捉

〔初音香之記〕

○ 隨蝶香(ずいちようこう) 小引 大枝流芳組

〔開元天寶遺事に曰く、開元末、明皇は、春の時に至る毎(ごと)に、
旦暮宮中に宴す。嬪妃(ひんぴ)の輩(ともがら)をして、艷花を争
わせ採(さ)しは(さま)しむ。帝、親(みずから)粉蝶を捉(と)り、

粉蝶放之隨蝶所止蒙之

け放すべしとて細かき

香四種也

- 一 芳花と名付け 四包
- 二 胡蝶と名付け 四包
- 三 官女と名付け 四包

右各内一包ずつ試みに出す

客「玄宗」と名付け 三包

右試みなし

右試み有りて、出香十二包打ちませ、其の内四包を

取除き残八包焚き出す。一炷びらきなり。

八包焚き終りて除き置くべし。四包の香の内

二包取り、一度に二炷焚き合せにして出すなり。

(残りの二炷は始終たかず)

初めに負けたりと終(つい)の連理を聞きし人を

「勝」と定むべし。

立物は、花十本、牡丹、芍薬、梅花、山吹、

海棠(かいどう)、瑞香、桃花(もものはな)、八仙(てまり)、躑躅、薔

海棠、瑞香、桃花、八仙、躑躅、薔薇

之を放つ。蝶の止まる所に隨いて之に幸(みゆき)す。「云々此の故事によりて組めるなり。」

香四種

- 一 「芳花」と名付け 四包
- 二 「胡蝶」と名付け 四包
- 三 「官女」と名付け 四包

右各内一包ずつ試みに出す

客「玄宗」と名付け 三包

右試みなし。

右試み有りて、出香十二包打ちませ、其の内四包を

取り除き、残り八包焚き出す。一炷びらきなり。

八包焚き終りて除き置くべし。四包の香の内

二包取り、一度に二炷焚き合せにして出すなり。

(残りの二炷は始終たかず)

初めに負けたりと終(つい)の連理を聞きし人を

「勝」と定むべし。

立物は、花十本、牡丹、芍薬、梅花、山吹、海棠(かいどう)、瑞香、桃花(もものはな)、八仙(てまり)、躑躅、薔

薇(しようび)なり。

盤は十行十五間、圖れど、矢数に盤
 を用ひてもしかるべし。「花」は初めより立て置き、
 當らざるは動かす事なし。当れば一間
 づつすすむ。「客」独間は三間、二人よりは
 二間なるべし。さて、盤の六間目に「銀の
 蝶」、十ならべ置き、ここに至れば蝶を花に
 とまらす。また、十一間目に「金の蝶」をな
 らべ置き、ここに至れば銀とかけかゆ(掛替)べし。

八炷終り連理を聞きし人は、聞きの多少を
 論ぜず、向こうまで行くなり。札の紋、立物の花
 に同じ。裏には、「芳花」三枚、「胡蝶」三枚、
 「官女」三枚、「玄宗」三枚なり。

- 隨蝶香之記香記 花の蝶蝶 花の蝶蝶
 女女 女女 女女 女女
 蝶蝶 花花 宗宗 女女 蝶蝶 宗宗 花花 宗宗
 牡丹牡丹 蝶蝶 花花 宗宗 蝶蝶 花花 宗宗 六六

「隨蝶香之記」

八炷終り連理を聞きし人は、聞きの多少を
 論ぜず、向こうまで行くなり。札の紋、立物の花
 に同じ。裏には、「芳花」三枚、「胡蝶」三枚、
 「官女」三枚、「玄宗」三枚なり。

芍薬 花 花 女 妹 妹 妹 妹 七
 梅花 花 花 女 妹 妹 妹 妹 八
 山吹 花 花 女 妹 妹 妹 妹 五
 海棠 花 花 女 妹 妹 妹 妹 七
 揚香 花 花 女 妹 妹 妹 妹 皆
 桃花 花 花 妹 妹 妹 妹 五
 八仙 花 花 妹 妹 妹 妹 四
 年号 月 日

○新玉川香（しんたまがわこう） 小引 同
 六所の玉川は、証歌、世に知ると事な
 ればここに略す。井出は山吹、津図（つのだ）は
 卯花、武蔵は調布、野路は萩、野田
 は千鳥にて四季雑の歌あり。高野
 は毒水なり。故に聞き誤れる人には
 過怠（かたい）の星付けるなり。「客」は、此の香催すの
 時節によりて季の歌ある玉川を以つて客

○新玉川香（しんたまがわこう）小引 同

（大枝流芳組）

六所の玉川は、証歌、世に知ると事な
 ればここに略す。井出は山吹、津図（つのだ）は
 卯花、武蔵は調布、野路は萩、野田
 は千鳥にて四季雑の歌あり。高野
 は毒水なり。故に聞き誤れる人には
 過怠（かたい）の星付けるなり。「客」は、此の香催すの
 時節によりて季の歌ある玉川を以つて客

やとへ

香六種也 井出玉川 津田玉川 武蔵玉川
野路玉川 野田玉川 高野玉川

右各二包づつ内一包づつ試みに出す。春は
折居を客と定め夏は津田を客と定
め秋は野路を客と定め冬は野田を
客と定むべし。客となす香は試みなし
残る五種試みすべし。試み終りて打ちませ焚き出

と一六柱聞き終りて札を開くべし。鶯に
包紙さし置き、札は折居にうつしおくべし。
客は一人聞きは三点、二人よりは二点なり。
武蔵は雑なれば季を聞き違え武
蔵と札打てば過怠の星一つ付ける。高野は
毒水なれば聞き誤る人には過怠の星
三つ付けるべし。外の香はあたりに点一つ、当ら
ざるは点なし。「花月香」のごとく星と点と

とすべし。

香六種なり

- 「井出玉川」 「津田玉川」 「武蔵玉川」
- 「野路玉川」 「野田玉川」 「高野玉川」

右、各二包づつ、内一包づつ試みに出す。春は
「井出」を客と定め、夏は「津田」を客と定
め、秋は「野路」を客と定め、冬は「野田」を
客と定むべし。客となす香は試みなし。
残る五種試みすべし。試み終りて打ちませ焚き出
すべし。六柱聞き終りて札を開くべし。鶯に
包紙さし置き、札は折居にうつしおくべし。
「客」は一人聞きは三点、二人よりは二点なり。
「武蔵」は雑なれば季を聞き違え武
蔵と札打てば過怠の星一つ付ける。高野は
毒水なれば聞き誤る人には過怠の星
三つ付けるべし。外の香はあたりに点一つ、当ら
ざるは点なし。「花月香」のごとく星と点と

消し合せて点何種、星何種と記録すべし

新玉川香記 廿子 林隆 津岡松虫
香蓋 杉川 津路 高根
うす 藤木 神南 老林

井 武 津 香 路 田

秋萩 井 路 井 武 田 一点

千鳥 武 井 路 井 田 一点

卯 井 武 井 路 田 一点

舞 火 井 武 田 付 路 香 一点

と 吹 田 井 武 香 路 井 一点

袴 衣 武 井 井 香 田 路 一点

年号月日

○巢立香すだちこう 小引 江芳山組

此組は万葉集に「鶯のかひこの中の
ほととぎすひとり生まれてさがちちに似
てはならずやささははににてはなか(啼)すや

消し合せて「点何種」、「星何種」と記録すべし。

〔新玉川香記〕

○巢立香(すだちこう) 小引 江芳山組

此の組は、万葉集に「鶯のかひこの中の
ほととぎすひとり生まれてさがちちに似
てはならずやささははににてはなか(啼)すや」

※『万葉集』では、「ながちち(汝が父)」、「ながはは(汝が母)」

かといふ香は、鶯の巢、鶯のくちの
鶯の鶯子の、わん、代々の古、
其の証、多し、鶯の巢立ちになり
ひく、雌雄の香、二つに「鶯(ほととぎす)の香」と名
付けるを一種入れ、此の三つを始めて聞くを「巢
ごもり」と名付け、雛の巢を出るに鶯
と鶯との別あるに比するなり。

香五行也

右の内一包づつ試に出す
鶯卵(ほととぎすのかいこ)と名付け一包

右試み終りて出香十二包を二包取り、「雌雄の
香」と名付け、其の内へまた鶯の香一包入れ打ちま
げて以上三包を焚き出す。此の三柱の香
は札を折居へ入れ置きて開かず、三柱目に

などいえる歌によれり。鶯のかいこ(卵)の中

には鶯子(ほととぎす)のある事、代々の古歌にも

其の証(しよう)多し。故に、鶯の巢立ちになり

いて雌雄の香二つに「鶯(ほととぎす)の香」と名

付けるを一種入れ、此の三つを始めて聞くを「巢

ごもり」と名付け、雛の巢を出るに鶯

と鶯との別あるに比するなり。

香五種なり

- 「一」四包 「二」四包 「三」四包 「四」四包

右の内一包づつ試に出す

「鶯卵(ほととぎすのかいこ)と名付け一包

右試なし 是客なり

右試み終りて出香十二包を二包取り、「雌雄の

香」と名付け、其の内へまた鶯の香一包入れ打ちま

げて以上三包を焚き出す。此の三柱の香

は札を折居へ入れ置きて開かず、三柱目に

札を(開く)此(間)を(巢籠)と云ふなり。札を
 開て後(鶉)の香を聞き当れば「鶉」の鳥を
 盤上に置き、三間すすむなり。記録も三点なり。
 「鶉」の香聞かざる人は「鶯」を盤を盤上に置き、一
 間すすむべし。「雌雄の香」はそれに一間づつ、
 三炷とも聞き当れば以上五間すすむなり。
 さて、此の三・過ぎて後は、残る十包焚き出す。
 尤も一炷びらきなり。聞きにしたがいて一間

けく鶯(鶯)も(鶉)の香を聞き当れば以上五間すすむなり。
 あり(白梅)一本立て置き、「鶯の親鳥」、雌
 雄を(とまらせ置く)べし。別に「鶯の雛」十
 羽、「鶉の雛」十羽(こしらえ置き、聞くにしたが
 いて盤に置く)べし。また向うに「紅梅」と「卯花」を
 立て置き(うぐいすの聞き多きは梅にとまらせ、鶉の聞き多きは卯花にとまらせ)べし。
 盤の目残らず行かずとも中にて聞き多きは「勝」

香道秋の巻

札を開く。此の間を「巢籠」というなり。札を
 開けて後、「鶉」の香を聞き当れば「鶉」の鳥を
 盤上に置き、三間すすむなり。記録も三点なり。
 「鶉」の香聞かざる人は「鶯」を盤を盤上に置き、一
 間すすむべし。「雌雄の香」はそれに一間づつ、
 三炷とも聞き当れば以上五間すすむなり。
 さて、此の三・過ぎて後は、残る十包焚き出す。
 尤も一炷びらきなり。聞きにしたがいて一間

づつ鶯、鶉ともに行く。盤は十五間に十行
 前に「白梅」一本立て置き、「鶯の親鳥」、雌
 雄をとまらせ置くべし。別に「鶯の雛」十
 羽、「鶉の雛」十羽(こしらえ置き、聞くにしたが
 いて盤に置く)べし。また向うに「紅梅」と「卯花」を
 立て置き(うぐいすの聞き多きは梅にとまらせ、鶉の聞き多きは卯花にとまらせ)べし。
 盤の目残らず行かずとも中にて聞き多きは「勝」

中よりゆえ花にとまらすべし

菓立香之記 香組 一〇八五 二種香
二種香 四七五里

結子香

| | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|
| 名茶 | 二種 | 四一 | 二四 | 四一 | 二二 | 二二 |
| 白梅 | 二種 | 一 | 四 | 二 | 一 | 三 |
| 系梅 | 二種 | 四 | 二 | 一 | 二 | 二 |
| 青柳 | 四 | 二 | 一 | 一 | 一 | 四 |
| 紫菱 | 二種 | 四 | 二 | 二 | 二 | 七 |

| | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|
| 梧桐 | 二種 | 四一 | 二四 | 四一 | 二二 | 二二 |
| 緑松 | 一 | 二 | 一 | 一 | 一 | 三 |
| 呉竹 | 二種 | 四 | 三 | 二 | 二 | 三 |
| 寒菊 | 二 | 二 | 四 | 三 | 三 | 五 |

辛卯月日

○扁突香 流芳組

香之行也 日三包 一正包 木三包

右の内一包包試に出す

詩經

とするゆえ、花にとまらすべし。

〔菓立香之記〕

○扁突香(へんつきこう) 流芳組

香三種なり

「日」三包 「一」三包 「木」三包

右の内一包包試に出す

右試み過ぎて残六包出香也。札紙を以つて聞くべし。聞き次第、文字三字に作り、書き出すべし。焼き合せ伝授の連中は二炷づつ三度に焼き合せにしても聞くべし。常は六包を一炷づつ六度に焚くべし。字の作りようは左のごとし。

六試み過ぎて残六包出香也。札紙を以つて聞くべし。聞き次第、文字三字に作り、書き出すべし。焼き合せ伝授の連中は二炷づつ三度に焼き合せにしても聞くべし。常は六包を一炷づつ六度に焚くべし。字の作りようは左のごとし。

右の九の文字の内にていづれにても作り出すべし。三字となる。

大々九乃文字れゆいづれにても作り出すべし。三字となる。

扁突香之記 香組

| | | |
|----|----|----|
| 日本 | 木下 | 一日 |
| 多奈 | 旦 | 杵 |
| 多奈 | 本 | 百 |
| 多奈 | 杵 | 目 |

日、紅梅、陰石、木、白朮

右試み過ぎて残六包出香なり。札紙を以つて聞くべし。聞き次第、文字三字に作り、書き出すべし。焼き合せ伝授の連中は二炷づつ三度に焼き合せにしても聞くべし。常は六包を一炷づつ六度に焚くべし。字の作りようは左のごとし。

- 「杲」(ゴウ あきらか) 「杳」(ヨウ はるか)
- 「本」(ホン もと) 「末」(ハツ すえ)
- 「旦」(タン あした) 「一日」(イチニツ コンくれ)

※「旦」を上二下逆さまに書いた字

- 「林」(リン はやし)
- 「二」(ジ ふたつ) 「昌」(シヨウ あきらか)

右の九の文字の内にていづれにても作り出すべし。三字となる。

「扁突香之記」

| | | | |
|----|---|---|---|
| 名茶 | 百 | 本 | 果 |
| 名茶 | 目 | 香 | 果 |
| 年号 | 月 | 日 | 香 |
| | | | 三 |
| | | | 二 |

○曲水香（きよくすいこう） 小引 流芳組

曲水の宴は、もろこし（唐土）にては周の世より始まり、我が国にては顕宗天皇元年弥生上の巳の日、文人、詩歌の人、東流のほとりにて盃を上より流し、その盃の我が前を通らざる中（うち）に詩を作り、酒宴をなせし故事を写し侍る。今、此の香組は「石に礙（さ）えぎ」られて遅く来れば心竊（ひそか）に待ち、流れに牽（ひ）かれて遄（速）く過ぐれば手、先ず遮る」と作りし詩の意（こころ）により。

茶を通らざる中に詩を作り酒宴をなせし故事と写しゆる今此香組は礙石遅来心竊待。牽流遄遮手先遮とゆるし詩の意により

香四種也

- 一 四包
- 二 四包
- 三 四包
- 右の内一包は試す物と
- 客一包試なし

右試み終りて残り十包を焼き出すべし。大底（抵）「十炷

○曲水香（きよくすいこう）小引 流芳組

曲水の宴は、もろこし（唐土）にては周の世より始まり、我が国にては顕宗天皇元年弥生上の巳の日、文人、詩歌の人、東流のほとりにて盃を上より流し、その盃の我が前を通らざる中（うち）に詩を作り、酒宴をなせし故事を写し侍る。今、此の香組は「石に礙（さ）えぎ」られて遅く来れば心竊（ひそか）に待ち、流れに牽（ひ）かれて遄（速）く過ぐれば手、先ず遮る」と作りし詩の意（こころ）により。

香四種なり
 「一」四包 「二」四包 「三」四包
 右の内一包は試す物と
 「客」一包試なし

右試み終りて残り十包を焼き出すべし。大底（抵）「十炷

香ねどもなく一炷開き也。盤は水を時
繪ふし十行は十二目なり。六目の間に
瀨あり。波を畫(えが)き「岩」を置くべし。向うには
桃花の立物一本を立ておき、前より人数
ほど「金銀の盃」を流すべし。始めより盃を
おき、一炷聞きて一間づつ行くなり。客は一人
にても、二人にても二間たるべし。さて、盃六間
目の瀨に至り、七間目へ瀨を越える時、

閑居する人の其次に香煙を聞かすも
盃を通すべからず。また、その次の香を聞きて
後通すべし。瀨を越ゆる時、聞き誤りし過
怠なり。「石に礙られて遅く来たる」という意なり。六間目
にても其の次を聞き当りし人は、すぐに通す
べし。向うの桃花の本まで、早く盃至りし
を「勝」と定むべし。包紙は試みには「筆包」を
用い、出香は「硯包」の法を用ゆ。文字の縁

香」のごとくにて一炷開きなり。盤は水を時
繪にし、十行に十二目なり。六目の間に
「瀨」あり。波を画(えが)き「岩」を置くべし。向うには
「桃花」の立物一本を立ておき、前より人数
ほど「金銀の盃」を流すべし。始めより盃を
おき、一炷聞きて一間づつ行くなり。客は一人
にても、二人にても二間たるべし。さて、盃六間
目の瀨に至り、七間目へ瀨を越える時、

聞き誤りたる人は、其の次の香聞き当るとも
盃を通すべからず。また、その次の香を聞きて
後通すべし。瀨を越ゆる時、聞き誤りし過
怠なり。「石に礙られて遅く来たる」という意なり。六間目
にても其の次を聞き当りし人は、すぐに通す
べし。向うの桃花の本まで、早く盃至りし
を「勝」と定むべし。包紙は試みには「筆包」を
用い、出香は「硯包」の法を用ゆ。文字の縁

盤の目は水の巻きしにて別(わか)つ
図のごとし。

曲水香之記

此の組はもろこしに「孟嘗君(もうしようくん)」といえる人
あり。秦王にとらわれしが夜にまぎれ、
のがれ出るとき、函谷の関、鶏の鳴かざる
かぎりには人の通いをとどむ。嘗君が三

惣桃 三
縁松 一
平号月日

関守香(せきもりこう) 小引 流芳組

此の組はもろこしに「孟嘗君(もうしようくん)」といえる人
あり。秦王にとらわれしが夜にまぎれ、
のがれ出るとき、函谷の関、鶏の鳴かざる
かぎりには人の通いをとどむ。嘗君が三

香道秘の巻下

「曲水香之記」
によるなり。盤の目は水の巻きしにて別(わか)つ。
図のごとし。

関守香(せきもりこう) 小引 流芳組

此の組はもろこしに「孟嘗君(もうしようくん)」といえる人
あり。秦王にとらわれしが夜にまぎれ、
のがれ出るとき、函谷の関、鶏の鳴かざる
かぎりには人の通いをとどむ。嘗君が三

千の客の中は鶏のなく音(こえ)をよくまね
 と人有りて、これがそらね(空音)をしければ、
 関守はその鶏の鳴きしと思ひ、まだ夜
 ふかきに関を開きて通しけりとなり。
 彼の鶏のそらねにあざむかれし意を
 うつし侍る。

香四種也

一 一包 二 二包 三 二包
 右の内一包づつ試み物と

客「鶏」と名付け 三包試なし

右試み有りて残り六包打ちませ焚き出す。連中、
 「孟嘗君方」「関守方」と双方へ別れ聞くべし。
 此の香は、残らず聞き終りに開き、記録すべし。
 札は一度一度折居へうつし置くべし。「孟嘗
 君方」は、随分聞き当るを「勝」とすべし。「鶏」
 の香、独聞二点、二人よりは一点、「鶏」を聞き
 誤りたる人は、過急の星一つ付くべし。

千客の中に鶏のなく音(こえ)をよくまね
 する人有りて、これがそらね(空音)をしければ、
 関守、まことの鶏の鳴きしと思ひ、まだ夜
 ふかきに関を開きて通しけりとなり。
 彼の鶏のそらねにあざむかれし意を
 うつし侍る。

香四種なり

「一」一包 「二」二包 「三」二包
 右の内一包づつ試み出す

客「鶏」と名付け 三包試なし

右試み有りて残り六包打ちませ焚き出す。連中、
 「孟嘗君方」「関守方」と双方へ別れ聞くべし。
 此の香は、残らず聞き終りに開き、記録すべし。
 札は一度一度折居へうつし置くべし。「孟嘗
 君方」は、随分聞き当るを「勝」とすべし。「鶏」
 の香、独聞二点、二人よりは一点、「鶏」を聞き
 誤りたる人は、過急の星一つ付くべし。

関守方せきしうは随分札を當らざるやうに打ちかえうちかへ無を聞くむをきくを勝かちとす。もし聞き当れば星一つ、無には点一つ、「鶏」を聞き当てれば過急の星二つ、聞き当らざる時は点二つ、「孟嘗君方」はよわみあり。「関守方」はつよみあり。因つて過急多し、無を聞く事、十炷香の古例にならぬ、出香六包は暁の時の数にかたどるなり。

関守香之記せきしうかう香紐かうじゆ 一 存ぞん 二 初はつ 三 二ふた 四 三さん 五 四よ 六 五ご 七 六む 八 五ご 九 四よ 十 三さん 十一 二ふた 十二 一いち 十三 二ふた 十四 三さん 十五 四よ 十六 五ご 十七 六む 十八 五ご 十九 四よ 二十 三さん 二十一 二ふた 二十二 一いち 二十三 二ふた 二十四 三さん 二十五 四よ 二十六 五ご 二十七 六む 二十八 五ご 二十九 四よ 三十 三さん 三十一 二ふた 三十二 一いち 三十三 二ふた 三十四 三さん 三十五 四よ 三十六 五ご 三十七 六む 三十八 五ご 三十九 四よ 四十 三さん 四十一 二ふた 四十二 一いち 四十三 二ふた 四十四 三さん 四十五 四よ 四十六 五ご 四十七 六む 四十八 五ご 四十九 四よ 五十 三さん 五十一 二ふた 五十二 一いち 五十三 二ふた 五十四 三さん 五十五 四よ 五十六 五ご 五十七 六む 五十八 五ご 五十九 四よ 六十 三さん 六十一 二ふた 六十二 一いち 六十三 二ふた 六十四 三さん 六十五 四よ 六十六 五ご 六十七 六む 六十八 五ご 六十九 四よ 七十 三さん 七十一 二ふた 七十二 一いち 七十三 二ふた 七十四 三さん 七十五 四よ 七十六 五ご 七十七 六む 七十八 五ご 七十九 四よ 八十 三さん 八十一 二ふた 八十二 一いち 八十三 二ふた 八十四 三さん 八十五 四よ 八十六 五ご 八十七 六む 八十八 五ご 八十九 四よ 九十 三さん 九十一 二ふた 九十二 一いち 九十三 二ふた 九十四 三さん 九十五 四よ 九十六 五ご 九十七 六む 九十八 五ご 九十九 四よ 一百 三さん

〔関守香之記〕

「関守方」には随分札を當らざるやうに打ちかえ「無を聞く」を「勝」とす。もし聞き当れば星一つ、無には点一つ、「鶏」を聞き当てれば過急の星二つ、聞き当らざる時は点二つ、「孟嘗君方」はよわみあり。「関守方」はつよみあり。因つて過急多し、無を聞く事、十炷香の古例にならぬ、出香六包は暁の時の数にかたどるなり。

香柳 三ツウツ一ニ
紫菱 三ツウツ一ニ
年号月日

○玉橋香 小引 落葉庵直風組
天浮橋は開闢の始なりは只一炷と
と雲の梯ハ二炷露の玉橋ハ七夕
の星合の橋なれば二つ合わざれば詮
なしとす。占問橋(うらとうはし)は、占うという心にて

試みなし。客の香とす。

香四種也

天浮橋 二包 雲の梯 三包
露玉橋 三包
右の内一包づつ試みなし
「占問橋」二包 試みなし

右試み三包終りて出香七包打ちませ焚き出す。
(出香七包は七夕の心を表す)
「露の玉橋」は二炷ともに聞き
当たれば、後の一炷は二点、以上三点となる。始

○玉橋香 小引 落葉庵直風組

天浮橋は開闢(かいひやく)の始めなれば、只一炷と
す。雲の梯(かけはし)は二炷、露の玉橋は七夕
の星合の橋なれば二つ合わざれば詮
なしとす。占問橋(うらとうはし)は、占うという心にて

試みなし。客の香とす。
香四種なり

- 「天浮橋」二包
- 「雲の梯」三包
- 「露玉橋」三包
- 右の内一包づつ試みなし
- 「占問橋」二包 試みなし

右試み三包終りて出香七包打ちませ焚き出す。
(出香七包は七夕の心を表す)
「露の玉橋」は二炷ともに聞き
当たれば、後の一炷は二点、以上三点となる。始

はくも後にも一炷、笑へばすたりと成す
なり。占問橋は一人聞は三点、二人よりは
二点、三人は一点、紙紙に聞くべし。外の香は
あり一点つなり。

玉橋香之記

浮橋 交治川
中橋 横火
玉橋 和久三
右問橋 村西

雲占浮玉雲玉占

早梅 到玉雲占雲玉占 五五
水仙 到玉雲占浮玉占 三五
玉桂 到玉雲占到玉占 十五
香竹 占玉玉占到浮雲 一点
年号月日

○子の日香

山本秀範組

香五種也

ちとせまで 二包
かさねる松も 二包
けふ(今日)よりは 二包
君にひかれて 二包

めにても後にも一炷聞きしは「すたり(麿)」と成す
なり。「占問橋」は一人聞は三点、二人よりは
二点たるべし。札紙にて聞くべし。外の香は
当り一点つなり。

「玉橋香之記」

○子の日香(ねのひこう) 山本秀範組

香五種なり

「ちとせまで」二包
「かさねる松も」二包
「けふ(今日)よりは」二包
「君にひかれて」二包

右の内一包は、試み物と

万代やへん一包試み客也

右試み四包終りて、出香五包打ちませ焚き出す。連中、「春日野方」「嵯峨野方」と両方へだてわかれ聞くべし。盤は、縦溝一筋、横は十二目なり。中に「勝負の場」あり。向うに「小松」六本、手前に「小松」六本、「大松」は双方に二本なり。是は置物なり。小松は聞くにしたがい一本

は、勝る方よりひき取るべし。連中、香数何種聞くと、松は勝る方ばかり一本ひくべし。客、独聞は二本、二人より一本ひくなり。双方の人形も聞きにしたがいて行くべし。手前の松ひきつくさば、向うの地へ入りて松を取るべし。香終らずとも松を引き尽さば、盤の勝負は終りなり。また、松引きつくさずとも、香終らば、多く引き取りし方を「勝」とするなり。

右の内一包つつ試み出す

「万代(よろずよ)やへん」一包試みなし客なり

右試み四包終りて、出香五包打ちませ焚き出す。連中、「春日野方」「嵯峨野方」と両方へだてわかれ聞くべし。盤は、縦溝一筋、横は十二目なり。中に「勝負の場」あり。向うに「小松」六本、手前に「小松」六本、「大松」は双方に二本なり。是は置物なり。小松は聞くにしたがい一本

は、勝る方よりひき取るべし。連中、香数何種聞くと、松は勝る方ばかり一本ひくべし。客、独聞は二本、二人より一本ひくなり。双方の人形も聞きにしたがいて行くべし。手前の松ひきつくさば、向うの地へ入りて松を取るべし。香終らずとも松を引き尽さば、盤の勝負は終りなり。また、松引きつくさずとも、香終らば、多く引き取りし方を「勝」とするなり。

記録ハ當リバかりと記ス。札ニハ一字づつ書き
テ記録モまた此ノ文字を用ユベシ。「持」ハ双
方トモ松を取り、人形モ行クナリ。

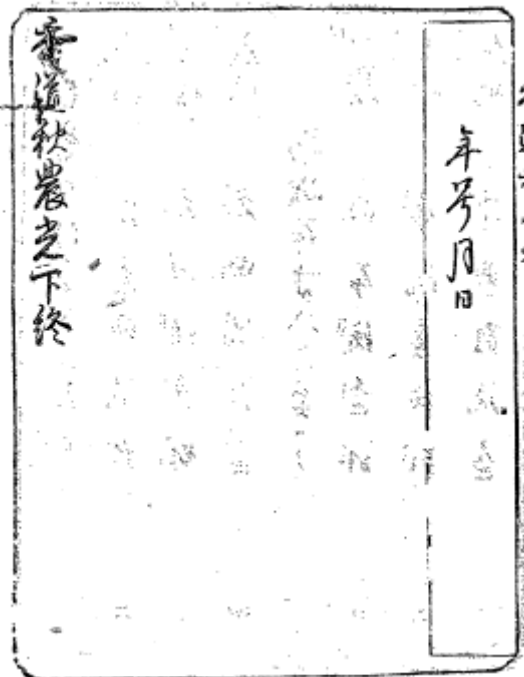
色ちとせまで 序かさねる松も 題けふよりは
曲きよく 流君にひきかれて
君にひきかれて 流万代やへん

子日香之記 香級
序 色 流 色 記
流 曲 色 記
流 曲 色 記
流 曲 色 記

春日祈方十二点 勝
白梅 序 色 曲 流 記 二
玉桂 序 曲 流 色 記 六
水仙 序 曲 流 色 記 四
活減祈方八点 負了
緑松 序 曲 流 色 記 四
青竹 序 流 色 曲 記 二
梧桐 序 曲 流 色 記 二

「子日香之記」

辺(へん) ちとせまで
序(じよ) かさねる松も
題(たい) けふよりは
曲(きよく) 君にひきかれて
流(りゆう) 万代やへん



香道秋農光下終り

【凡例】

- ① 句読点、「」、送り仮名等は適宜追記しました。
- ② 旧仮名使いを新仮名使いに適宜改めました。
- ③ 黒字の（）は、本文内に小文字で記された注記です。
- ④ 青字の（）は、筆者の補足です。
- ⑤ 赤字は、判読等に曖昧な点がある部分です。

令和二年二月

『香筵雅遊』國井和裕